短期派遣 EUROPA 派遣報告書

博士後期課程 3 年　柴田　瑞枝

1.　派遣先：ボローニャ大学（イタリア）

2.　派遣期間：2012 年 9 月 9 日～2013 年 2 月 14 日

3.　派遣概要：

水準が高く、伝統あるボローニャ大学大学院のイタリア学科において自らの研究分野についての知見を深め、東京外国語大学大学院とボローニャ大学大学院の共同学位制度を利用して、イタリア語による博士論文を執筆することが最終的な目標です。目標達成のため、派遣中は日々日本では入手・参照が困難な資料の蒐集に尽力することはもちろん、ローマを本拠地とするアルベルト・モラヴィア基金と定期的に連絡を取り、研究作家関連の学会などにも積極的に参加するよう努めました。

4.　研究成果と今後の課題：

ボローニャ大学で研究をするのは今回が初めての経験でしたが、家探しが難航した点を除けば、この 5 ヶ月間の滞在は、地元の人々（大学関係者や、公立・私立図書館の司書の方々など）にも助けられ、大変恵まれた環境で勉強ができたと思います。

派遣開始からひと月弱は事務的な手続きに追われたものの、2012 年 10 月からは、派遣先の指導教官である、マルコ・アントニオ・バッゾッキ先生の講義「イタリア現代文学」に通いました。さいわいなことに、私自身、博士論文で是非言及したいと考えていた作家（カルロ・レーヴィ、チェーザレ・パヴェーゼなど）や作品が授業で大きく取り上げられ、おかげで新たな視点から問題を捉えることができ、論文執筆のために非常に有用なヒントを頂きました。

バッゾッキ先生とは、3、4 週間に一度の頻度で面会し、その都度、研究の進捗情況をご報告したり、特定の話題について、先生のご意見を伺ったりしました。私はモラヴィアの女性一人称作品を中心に博士論文を構成するつもりですが、先生がテーマの類似した先行研究論文をいくつか勧めてくださったので、今後イタリア語で論文を執筆する際の参考にしたいと思っています。

11 月には、モラヴィアの生誕日に合わせ、ローマでアルベルト・モラヴィア基金主催の小規模のシンポジウムが開催されたので、それに足を運びました。モラヴィアと

長年連れ添った作家のダーチャ・マライーニ、ジャーナリストのフーリオ・コロンボなど、生前の作家をよく識る顔ぶれが揃い、個人的な逸話などを交えて談話が行われました。こうした機会は、残念ながら日本では滅多にないので、イタリアで研究ができることの有り難さを身にしみて感じた次第です。

さて、今回の派遣期間中に、イタリア学会誌に投稿予定の小論文を一点執筆しました。タイトルは「『深層生活』にみるモラヴィアの「声」──女性一人称と対話の叙述形式」で、モラヴィアが7年という歳月をかけて執筆し、1978年に発表した、*La vita interiore*(『深層生活』)という作品を中心的に扱いました。

この作品は、モラヴィアが書いた最後の女性一人称長編にあたり、作家のそれまでの作品には見られることのなかった、「対話」の叙述形式が導入されています。1968 年の異議申し立て運動(コンテスタシオン)を背景にしており、著者モラヴィア=「私」が、「デジデーリア」という少女にインタビューし、彼女がジャンヌ・ダルクと同じように「声」に導かれ、テロリストになるまでの一連の出来事を語る、という一風変わった形を取っています。

注目すべきは、戦後発表された *La Romana*(『ローマの女』、1947)や *La Ciociara*(『チョチャリーアの女』、邦題『二人の女』、1957)で問題視されたような語りの「真正さ」の問題を、モラヴィアが、ある種伝統的な「対話」という用法を導入することで解決している点です。また、モラヴィアは'68 年の運動という特殊な歴史的出来事に強い関心を持っていましたが、当時学生たちから「ブルジョワ的作家」として非難を受けたという事情もあって、運動に対し、期待と落胆の入り交じった複雑な感情を抱いていました。こうしたモラヴィアの政治的動向が、『深層生活』のなかにどのように反映されるのか、という点も、小論文のテーマのひとつになっています。

今回、小論文を執筆するにあたって大変大きな収穫となったのが、『深層生活』出版当時(1978 年)の書評、評論を数多く参照できたことでした。それにより、これまで「先行研究」とひとまとめにして考えがちだった批評の数々も、それらが書かれた時代や、情況や、評者の特定の立場によって、意味合いが様々に異なるのだということを今回改めて実感しました。基本的なことには違いありませんが、今後博士論文執筆を進めていくうえで、等閑視してはならない問題だと思います。

今度の滞在では、未だ詳細なテクスト分析に踏み込めていなかった『深層生活』について一点小論文を執筆できたことが、ひとつの研究成果となりました。しかし、これは飽くまで、これからイタリア語で執筆する博士論文の基礎となるものであり、研究の出発点に過ぎません。今後は、イタリア語で文章を書く作業に重点を置き、共同学位取得という最終目標に向け、速やかに博士論文執筆に取りかかりたいと考えております。